秋田県能代市（二〇二四年一〇月二六日）

石川啄木再入門―その作品の魅力と秋田県とのかかわり―

明治大学教授、国際啄木学会会長　池田　功

【石川啄木】一八八六年（明治十九年）に、岩手県（現在の盛岡市）の曹洞宗僧侶の父石川一禎（歌稿ノート「みだれ芦（あし）」約三八〇〇首収録を残す）と、母工藤カツの長男として、常光寺に工藤一として生まれる。その後宝徳寺に移り、石川一に変更。盛岡中学校に十番の成績で入学。先輩に金田一京助がいた。また十一年後に宮沢賢治が入学する。与謝野鉄幹・晶子の「明星」に投稿し、二人の強い影響を受ける。最終学年の五年の時に退学する。

満十九歳で詩集『あこがれ』刊行し、天才詩人と呼ばれる。同じ年に堀合節子と結婚。長女京子が生まれる。長男真一生まれるも二十日あまりで亡くなる。啄木の死後に次女房江が生まれた。小学校の代用教員や北海道での新聞記者、朝日新聞の校正係を務めた。

歌集『一握の砂』、『悲しき玩具』や私家版詩集『呼子と口笛』、評論「時代閉塞の現状」や「ローマ字日記」等が今日も読みつがれ評価されている。一九一二年（明治四五年）に結核性の全身衰弱で亡くなる。若山牧水が最期を看取る。夏目漱石も葬儀に参列。二十六年二ヶ月の生涯。その後、啄木の遺骨は、友人の宮崎郁雨の手により、北海道函館の立待岬（たちまちみさき）に葬られる。啄木一族の墓は、ここにある。

（現在、啄木の直系の子孫がいる。啄木の長女の京子は婿養子を迎え石川の姓を継ぐ。孫の名前は真一である。そして今は、玄孫（やしゃご）の代になっている。）

1，日本国内の受容

（中学高校の国語の教科書に掲載される短歌の数として、戦前戦後を通してほぼトップ。ただし戦前は望郷のセンチメンタルな歌や親孝行短歌と言われるものが多かったが、戦後は少年時の夢を抱く歌や、リズム感覚にあふれたり、命をいとおしむ歌に変化している。）

・不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心（盛岡城に歌碑）

・友がみなわれよりえらく見ゆる日よ／花を買ひ来て／妻としたしむ

・やはらかに柳あをめる／北上の岸辺目に見ゆ／泣けとごとくに

・いのちなき砂のかなしさよ／さらさらと／握れば指のあひだより落つ（湯川秀樹）

・たはむれに母を背負ひて／そのあまり軽きに泣きて／三歩あゆまず

① 歌碑は現在一七〇基ほどある。

② 現代歌謡曲への啄木短歌の影響、あるいは本歌取り。

・石原裕次郎「錆びたナイフ」（昭和三二年）、橋幸夫「孤独のブルース」（昭和三九年）。大津美子・倍賞千恵子「純愛の砂」（昭和五一年）、谷村新司「昴」（昭和五五年）他。

・谷村新司「昴」との類似性。

「昴」……「目を閉じて　何も見えず　哀しくて目を開ければ」

（啄木短歌「目閉づれど、／心にうかぶ何もなし。／さびしくも、また、眼をあけるかな。」）

「昴」……「呼吸（いき）をすれば胸の中　凩（こがらし）は吠（な）き続ける」

（啄木短歌「呼吸（いき）すれば、／胸の中（うち）にて鳴る音あり。／凩よりもさびしきその音！）

③ 啄木の影響を受けた人

・湯川秀樹『天才の世界』（昭和四八年）の「石川啄木」。『一握の砂』は全部好きですね。好きというだけでなく、全部がうまいですね。」その中でも一番好きなのは「いのちなき砂のかなしさよ……」であるとし、「物理学の自然法則のようなものをつかもうと思ってもなかなかつかめぬ。握ったつもりでいたのが、指の間からさらさらと落ちていく。そういういろいろなことが見事に集約されて、一つの歌に表現されている。」、二番目に好きなのが「己が名をほのかに呼びて／涙せし／十四の春にかへる術（すべ）なし」の歌。

・寺山修司（青森県出身）「啄木祭のビラ貼りに来し女子大生の古きベレーに黒髪あまる」「便所より青空見えて啄木忌」、「函館の砂に腹ばいはるかなる未来想えり夕ぐれの時」「砂山に夕日沈みて君一人砂に書く名の人いずこなる」「ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲（コーヒー）はかくまでにがし」

・井上ひさし（山形県出身）「東海の小島の磯の白砂に……」、「きしきしと寒さに踏めば板軋（きし）む／かへりの廊下の／不意のくちづけ」の歌が好き。詩「飛行機」は高校時代から愛唱。

・戯曲『泣き虫なまいき石川啄木』（昭和六一年）（この戯曲は、一九〇九年（明治四二年）七月に、北海道の宮崎郁雨に預けていた妻の節子と母のカツと娘の京子が上京し、啄木と一緒に生活し始める時期が背景となっている。そこで、家族を顧みない啄木に嫌気がし、節子が家出し実家に戻る出来事や、戻った節子が宮崎郁雨からの「あなただけの写真を送ってほしい」という手紙を啄木が見てしまい、二人の関係を疑ったことなどが描かれている。この夫婦の危機感を描いたのは、丁度井上ひさしの奥さんの好子さんが、井上の主宰するこまつ座の舞台監督と不倫していたことが発覚し、家庭内が大騒動になっていた時であった。）

2，国外での受容

・短歌を中心に十九の言語に翻訳されている。（アジア圏では、中国語、韓国語、インドネシア語、ヒンディー語等。西欧圏では、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語等。）

・「はたらけど／はたらけど猶わが生活（くらし）楽にならざり／ぢつと手を見る」が台湾、韓国、アメリカ、インド等で貧しさや労働者の悲哀の歌として共感されていた。

・最近は、「やはらかに積もれる雪に／熱（ほ）てる頬を埋（うづ）むるごとき／恋してみたし」のような恋の歌が、海外の女性や若者に人気がある。

3、短歌の魅力

（1）第一歌集『一握の砂』（明治四三年）（五章で五五一首）

・（巻頭歌）「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」（太宰治『津軽』（昭和十九年）に、「東海の～」と啄木短歌を歌う津軽の人を描いている。）

・「頬につたふ／なみだのごはず／一握の砂を示しし人を忘れず」（歌集の題名となる）

・「砂山の砂に腹這ひ／初恋の／いたみを遠くおもひ出づる日」（歌曲として歌われている）

（橘智恵子をめぐる二二首の相聞）

・いつになりけむ／夢にふと聴きてうれしかりし／その声もあはれ長く聴かざり

・世の中の明るさのみを吸ふごとき／黒き瞳の／今も目にあり（ＮＴＴの広告・薬師丸ひろ子）

・君に似し姿を街に見る時の／こころ躍（おど）りを／あはれと思へ

・わかれ来て年を重ねて／年ごとに恋しくなれる／君にしあるかな

（長男真一の死を詠んだ八首の挽歌）
・夜おそく／つとめ先よりかへり来て／今死にしてふ児（こ）を抱けるかな
・真白なる大根の根の肥ゆる頃／うまれて／やがて死にし児のあり
・おそ秋の空気を／三尺四方ばかり／吸ひてわが児の死にゆきしかな
・かなしくも／夜明くるまでは残りゐぬ／息きれし児の肌のぬくもり

（2） 第二歌集**『悲しき玩具』**（啄木の死後の明治四五年六月に刊行）（一九四首）
・（タイトルは啄木のつけたものではなかった。友人の土岐善麿（哀歌）が啄木の評論「歌のいろいろ」の、「歌は私の悲しい玩具である」から命名した。）
・（表現が『一握の砂』になかった、句読点（、）、ダッシュ（―）、感嘆符（！）、字下げ、二重かぎ（『　』）、字余りが多く使われた。
（病気に関する歌）
・今日もまた胸に痛みあり。／死ぬならば、／ふるさとに行きて死なむと思ふ
・ふくれたる腹を撫（な）でつつ、／病院の寝台に、ひとり／かなしみてあり。
（社会性のある歌）
・「労働者」「革命」などといふ言葉を／聞きおぼえたる／五歳の子かな。
・百姓の多くは酒をやめしといふ。／もつと困らば、／何をやめるらむ。

（3）啄木調短歌
① 形式面での三行書き。（啄木が最初ではない。土岐哀歌の『NAKIWARAI』の影響。）
② 内容面では日常生活をテーマとする。（その後「生活派」として影響してゆく。）
③ その時代の言語を使用する。（啄木短歌は口語調ではあるが、文語も使用している。）

（4）啄木短歌の受容時期と時代背景
①一九六〇年代の高度経済成長期
・ふるさとの訛（なまり）なつかし／停車場の人ごみの中に／そを聴きにゆく（上野駅に歌碑）
・馬鈴薯のうす紫の花に降る／雨を思へり／都の雨に
② 一九七〇年～一九八〇年代の校内暴力・家庭内暴力の激しかった時代（尾崎豊）
・不来方のお城の草に寝ころびて／空に吸はれし／十五の心
・夜寝ても口笛吹きぬ／口笛は／十五の我の歌にしありけり
③ バブル崩壊後のフリーター・派遣労働者問題が発生した時期
・はたらけど／はたらけど猶わが生活楽にならざり／ぢつと手を見る
④ 二〇一一年三月十一日の東日本大震災
・新しき明日の来るを信ずといふ／自分の言葉に／嘘はなけれどー

4，詩の世界
（1）『あこがれ』は現在ほとんど評価されず読まれていない。
（2）私家版詩集『呼子と口笛』（明治四四年）
①「はてしなき議論の後」
われらの且つ読み、且つ議論を闘はすこと、
しかしてわれらの眼の輝けること、

五十年前の露西亜の青年に劣らず。
われらは何を為すべきかを議論す。
されど、誰一人、握りしめたる拳に卓をたたきて、
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。
・('V NAROD!' とは、「ブ・ナロード＝人民の中へ」という意味で、ロシア革命の時にこの言葉を叫んで農民や民衆に中に入っていった、一八七〇年代の青年に対して、五〇年後の明治時代の青年は、議論はしてもなかなか行動を起こさないことに対する焦燥がテーマ。)

② 「飛行機」
見よ、今日も、かの蒼空に、
飛行機の高く飛べるを。

給仕づとめの少年が
たまに非番の日曜日、
肺病やみの母親とたつた二人の家にゐて、
ひとりせつせとリイダアの独学をする眼の疲れ……

見よ、今日も、かの蒼空に、
飛行機の高く飛べるを。

5，啄木と秋田県とのかかわり（参考資料・岩田祐子さんのブログ「啄木の息」）

・母方の曾祖母、熊谷エイは鹿角市毛馬内の常照寺に生まれた。
・啄木の長姉サダは、一八九一年（明治二四年）秋田県の小坂鉱山で働く田村叶と結婚。しかし、五人の子供を残し、明治三九年（三一歳）結核で亡くなる。啄木日記（明治三九年三月一九日）には、以下の通り記されている。「小坂の義兄田村叶から来信。姉の命日が先月の二十五日であつた事、死因が肺結核であつた事、漸やくわかつた。ああ不幸なる姉は遂に不幸の内に幼なき五人の子女を残して死んでしまつたのだ。安心の日無き三十一年の寿命、人の世の盛りとは云ふが、我が姉には百年の思ひがしたであらう。自分は、一生を不運に過した貧しい姉が、終焉の時近き来る病床に横はり、度々の喀血に気力おとろへ、痩せて蒼ざめて見る影もなき顔をあげて、枕辺に泣いて居並ぶ五人の子女を見廻はしたであらうその歳の惨憺たる光景を明らかに心に描くに堪えぬ。（中略）母は昨日この村の巫女の所に行つて、姉が亡魂を招き吊（つ）ろふた。」

★一九〇一年（明治三四年）、啄木は友人たちと秋田県鹿角地方を旅行した。とりわけ錦木伝説に強い関心を持ち、いくつかの作品に詠んだ。

・【短歌】
◎盛岡中学校校友会雑誌三月号（第三号）（明治三五年三月）
にしき木　（短歌）二首
・夕雲に丹摺（にずり）はあせぬ湖（うみ）ちかき草舎（くさや）くさはら人しづかなり

・甍射る春のひかりの立ちかへり市のみ寺に小鳩むれとぶ

・【詩】の（1）

◎「明星」（一九〇四年（明治三七）年二月号）

「錦木塚」（未完に終わった）

★「雑誌『明星』に発表時のあとがき」（この詩の制作動機の説明）

（秋田県鹿角郡、花輪より小坂に至る途上、毛馬内の南十町許にして路傍に錦木塚あり。悲愁鎮魂の伝説今に伝はりて、心ある旅人の幾世かこゝに涙を濺（そそ）ぎけん。我十六歳の年友とこの古跡を探りて、故老の情けに古記を抄録し帰りける者、今猶蔵して篋底（きょうてい）にあり。この吟をなしえたる、それ或は多少の縁あるか。）

★詩集『あこがれ』に収録したときの詞書

（昔みちのくの鹿角の郡に女ありけり。よしある家の流れなればか、かかる辺（へ）つ国はもとより、都にもあるまじき程の優れたる姿なりけり。日毎に細布織る梭（をさ）の音にまさりて、政子となむ云ふなる其名のをちこちに高かりけり。隣の村長（むらおさ）が子いつしかみそめていといたう恋しにけるが、女はた心なかりしにあらねど、よしある家なれば父なる人のいましめ堅うて、心ぐるしうのみ過してけり。長の子ところの習はしのままに、女の門に錦木を立つる事千束に及びぬ。ひと夜一本の思ひのしるし木、千夜を重ねては、いなかる女もさからえずとなり。やがて千束及びぬれど政子いつかなうべなふ様も見えず。男遂に物ぐるほしうなりて涙川と云ふに身をなくしてけり。政子も今は思ひえたえずやなりけむ、心の玉は何物にも代へじと同じところより水に沈みにけり。村人共二人のむくろを引き上げて、つま恋ふ鹿をしのび射にするやつばら乍らしかすがにこのことのみにはむくつけき手にあまる涙もありけむ、ひとつ塚に葬りて、にしき木塚となむ呼び伝へける。花輪の里より毛馬内への路すがら、今も旅するひとは、涙川の橋を渡りて程もなく、草原つづきの丘の上に、大きなる石三つ計り重ねて木の柵など結びたるを見るべし。かなしとも悲しき物語のあとかた、草かる人にいづこと問へばげにそれなりけり。伝へいふ、昔年々に都へたてまつれる陸奥の細布と云ふもの政子が織り出しけるを初めなりとかや。）

※「錦木」……一尺ほどの木に種々の色でまだらに彩色した木で、男が女の家の前に立てて求愛の印とした。

★古くからこの「錦木伝説」は知られていた。

・錦木伝説は、平安時代頃に奥羽地方産出の細布と同地方の風俗錦木が重ね合わせて成立したと考えられる。

・能因法師が、平安時代中期の一〇二五年に陸奥を旅し、現地に行った可能性がある。

「錦木は立てながらこそ朽ちにけれ狭布（きょう）の細布（ほそぬの）の胸あはじとや」

「錦木は千束（ちづか）になりぬ今こそは人に知られぬ閨（ねや）のうち見め」

・室町時代の世阿弥が、曲目「錦木」を書いて上演した。この曲目の中に、能因法師の二首が引用され作品の核となっている。

・江戸時代の奥羽地方の案内記類には、この伝説の記述が多く見られる。

▲啄木の詞書きと「伝説」を記す掲示板との相違。

・啄木は、男性の方を「隣の村長が子」「長の子」と書いているが、娘の父親がなぜそれほど反対したのかが分かりにくい。また、政子自身もなぜ嫁に行かなかったのかが分かりにくい。

「錦木塚伝説」の掲示板には、「父が身分の違いを理由に反対したためであった。**もう一つのわけ**もあった。五の宮嶽の頂上に大ワシがすんでいて、付近の村から幼い子たちをさらっていった。或る時古川で托鉢に立ち寄った旅僧は、若い夫婦がわが子を失い泣いていたのでそのわけを聞き、鳥の毛を混ぜた布を織って着せれば、ワシは子どもをさらえなくなると教えてくれた。鳥毛をまぜた布はよほど機織りが上手でないと作れない。政子姫はみんなから頼まれ、親の悲しみを自分のことのように思い、三年三月の間観音に願をかけ身を清めて布を織っていたのである。そのために嫁に行くという約束は出来なかった。」と記されている。

★啄木のこの詞書きの後に、「にしき木の巻」（三連四八行）、「のろひ矢の巻（長の子の歌）」（七連四九行）、「梭（をさ）の音の巻（政子の歌）」（一七連六八行）の大長編詩が続いている。

（一）
槇原に夕草床布きまろびて
淡日影旅の額に射し来る丘、
千秋古る吐息なしてい湧く風に
ま白雲遠つ昔の夢と浮び
彩もなき細布ひく天の極み、
あゝ今か、浩蕩なる蒼扉つぶれ

・**【詩】の（2）**

◎「明星」　一九〇六年（明治三九）年一月号

「鹿角の国を憶ふ歌」（五四行の長編詩）

青垣山を繞らせる
天ささかる鹿角の国をしのぶれば
涙し流る。―今も猶、錦木塚の
大公孫樹、月良き夜は夜なよなに
（中略）
鹿角をしのぶれば、
涙し流る。
（後略）

★現在この詩は、鹿角市役所に「石川啄木詩碑」（昭和六〇年七月建立）となっている。

「**錦木塚**に**だんぶり長者**の二伝説を重ね、**十和田湖**と**大日堂**の描写を織り交ぜて一遍としたものである。さきに未完に終わった『錦木塚』に代えて、さらに思想を**鹿角全域**に広げたという趣きである。啄木がこのように一つの土地に執着して、二つもの長編詩を詠んだということは他に例を見ない。」（「鹿角市史」第三巻上）

★現代語訳がある。（海沼志那子　旧姓川又）（錦木塚展示室より）以下はこの現代語訳を使用。

① 「錦木塚」の伝説

錦木塚の大公孫樹は、月夜の晩には、
夏でも黄金色に変り、昔からの
若々しい恋の話を伝えてくれます。

② 「だんぶり長者」の伝説

★「だんぶり」とは、鹿角の方言でトンボのことである。昔、現在の秋田県大館市比内町独鈷に娘がいた。その娘の夢に川上に行けば夫になる男に出会うと告げられたので、川上に行くとその通りになる。また、ある時老人が夢に現れ、もっと川上に行けば徳のある人になるだろうと告げられ、夫婦で移り住み懸命に働いた。ある日、夫がうとうとしていると、一匹のだんぶり（とんぼ）が飛んで来て、夫の口に触れた。夫は目を覚まして「不思議なうまい酒を飲んだ」と思い、だんぶりの後を追った。そして岩陰に酒が湧く泉を発見する。夫婦はこの泉で大金持ちになった。人々も夫婦の家に集まってきた。人々が研ぐ米汁で、いつしか川は「米代川」と呼ばれるようになった。夫婦には秀子という娘がいたが、継体天皇に仕えて、吉祥姫と呼ばれた。夫婦も天皇から「長者」の称号を与えられ、「だんぶり長者」として慕われた。

神の使いのトンボが教えてくれた聖なる泉、
そこから流れ出た尽きることのない、
米白川の水が潤って、草茂る豊かな、
鹿角の国を思うとき、
感動の涙が流れてきます。

③ 「十和田湖」

十和田の嶽の古い沢に、
昔から鬼が住むという深い峡は、
たちこめるガスに濡れて、人の立入った跡もなく、
岩苔の緑を吸いながら流れ落ちる
渓流の崖に、雄鹿が妻をもとめて恋い啼くのに、
人が近づいても、恐れる風もないという。
そんな鹿角の国を思うと、
感動の涙が流れてきます。

④ 「大日堂」

肩に白雲を頂いた、神寂びた逆矛杉、
その根元の深い洞の中に、
神が住んでいると伝えられている大日堂

（ラストの三行）
神代から脈々と続いている、
そんな鹿角の国の情景を回想していると、
感動の涙で満たされます。